

もし、経皮的曝露(針刺しなど)が起きたら

1 応急処置

- ★受傷後直ちに受傷部位の血液を絞り出すようにして石鹸を併用して大量の流水下で洗浄する。
- ★消毒用エタノール、10%ポビドンヨード等、または0.1%次亜塩素酸ナトリウム等で消毒する。

2 報告・連絡・記録

- ①直ちに院長等の責任者へ報告する
- ②感染が疑われる場合は、検査のため病院(拠点病院)に連絡し、必要に応じ予防服薬
- ③受傷事故記録を作成する

病院における検査と処置

- 受傷者のみならず、曝露源の患者の血液検査をすみやかに行う。曝露源の患者から採血の同意が得られない場合や患者が不明の場合には、血液曝露の状況を判断し曝露後の処置を選択する(すなわち、血液曝露が著しい場合には曝露源がHBs抗原陽性、HCV抗体陽性とみなす。ただし、HIVは陰性に準じる)。
- 曝露が明らかで、感染の危険性が想定される時には、表のような曝露後処置(予防処置)を行う。

表 病院における検査・処置の流れ

曝露源の血液	処置
HIV抗体陽性	速やかに(およそ2時間以内)に曝露後予防薬を内服する。2017年現在はツルバダ、アイセントレスが推奨されている。都道府県により異なるが、通常、予防薬はエイズ診療拠点病院等に準備されている。 (2000年以降医療従事者で経皮的曝露によりHIVが感染した事例はない。)
HBs抗原陽性	受傷者のHB抗体陰性ならば、48時間以内に高力価抗HBsヒト免疫グロブリン(HBIG)接種、1週間以内にHBワクチン接種をする。1、6か月後にもHBワクチン追加接種し、血液検査を行い経過観察となる。
HCV抗体陽性	感染の危険性があるが、推奨される予防処置はない。経皮的曝露による感染は疫学的研究から2%以下と推測されているが、内科専門医による経過観察を受ける。

経皮的曝露(針刺しなど)は防げます

歯科医療を安心して提供するために

2017年3月(改訂)

使用済みの注射針による経皮的曝露(針刺しなど)は日常の臨床でいつでも起こりうることである。

この経皮的曝露(針刺しなど)によって、HIVや肝炎等の感染症に感染する確率は一般的には高くないとされているが、その危険性は否定できない。

歯科医療の現場において、歯科医師をはじめ歯科衛生士や歯科助手等のスタッフが経皮的曝露(針刺しなど)によって感染することを防止していくためには、器具の正しい操作・手順を心がける必要がある。

もし、誤って経皮的曝露(針刺しなど)が発生した場合は、直ちに応急処置を行うとともに、感染が疑われる場合は病院における検査や処置を行う等、適切な対応を行わなければならない。

本リーフレットは、院内感染の防止対策を講じる観点から、日常ともすれば見落とされがちな経皮的曝露(針刺しなど)に焦点を当て、その防止と万一への対応のあり方について示したので参考にされたい。

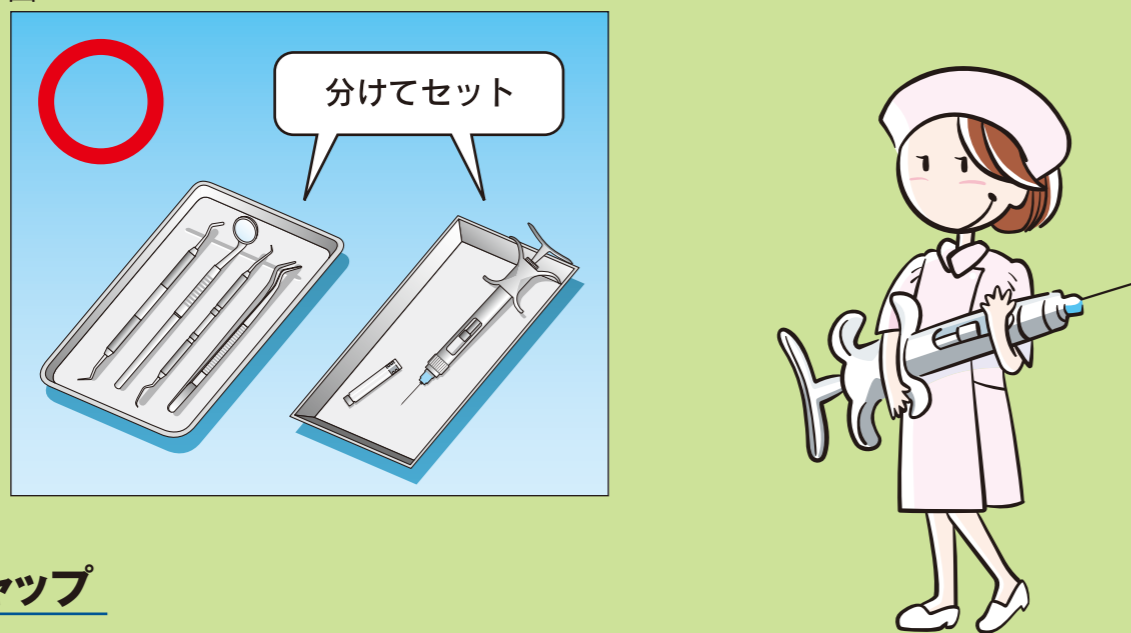
経皮的曝露(針刺しなど)を防ぐために

経皮的曝露(針刺しなど)はリキャップ時に最も多く発生しています。医療従事者の感染防御(特にHIV、HBV、HCV等)として、正しい器具の操作で、事故を未然に防ぎましょう。

1 器材の準備

注射器は別の小トレイに分けてセットする。小トレイは持ち運びの際に手指が器具に触れないようになるべく底の深いものを使用する(図1)。

図1



2 リキャップ

【注射針には必ずキャップする】

リキャップは以下の方法が安全である。

- ①キャップをテーブルの上に置き、針ですくい上げるようにして行う(図2)。
- ②両手をテーブルの上に置き安定させ、角度をつけて行う。不安定なフリーハンドの状態では危険です(図3)。

図2

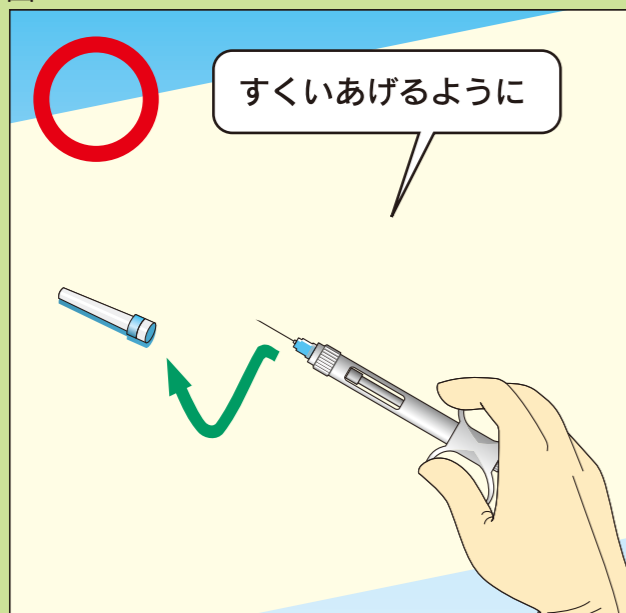


図3



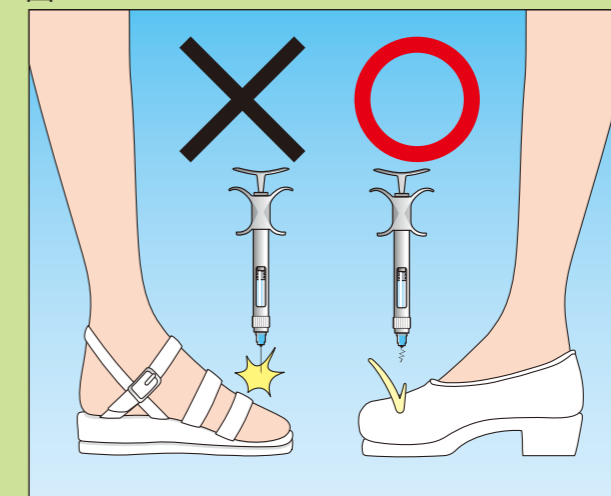
3 針の着脱のとき

注射器から針を外す場合は、キャップを針にしっかりとめ込み、手元が滑らないように注意する。

4 注射器の取扱い

- ①必ず手袋を装着する。
- ②足元の保護のためシューズはサンダルタイプのは避け、できるだけ足全体を覆うものを選ぶ(図4)。
- ③注射の際は、処置が終了したことを告げるまで動かないよう、あらかじめ患者さんに説明する。
- ④注射器の受け渡しの際はリキャップする(「2.リキャップ」の項参照)。
- ⑤注射針を扱う際は、手元がよく見えるように明るい場所で行う。
- ⑥裸針のついた注射器の受け渡しは、原則としてしない。

図4



5 針を廃棄するとき

- ①使用済みの注射針は、感染性医療廃棄物として区分し、専用容器に捨てる(図5)。
- ②専用容器は使用済みの注射針が一杯になる前に交換する。

図5



☆統計上、経皮的曝露(針刺しなど)の際は「人差し指」を刺すケースが多い。手元を安定させるためにも、作業は必ず自分の利き腕を使って無理なく行う。